

『M先生とスキー』

私がM先生にスキーを“はかせた”のは、今からもう8年前のことだ。“はかせた”と言えば聞こえは悪いが、結果的には“はかせた”ことになるだろうか。

当時、私が在職した学校の1年生には冬の遠足があった。体育の時間に2回、地元のスキー場でスキー学習を行い、2月の後半にスキーのまとめの学習として七飯のスノーワールドへ出かけた。その時のことである。

M先生が、寒空の下スキー小屋近くのベンチに腰掛け、生徒を見守っていたのだ。生徒を指導してゲレンデから戻ってきた私は、何とも気の毒になり生徒と一緒に滑らないのかと尋ねた。運動は不得手なこと、スキーは滑ったことがなく用具もないということだった。

このM先生、運動は得手ではないが陸上の指導はベテラン。特に砲丸投げの指導では全国大会に出場する選手を育てる力を持つ先生だ。中体連男子の砲丸投げで北海道チャンピオンを輩出したこともある。

学級経営、生徒指導、教科指導にと頑張るこの先生に、黙ってベンチに腰掛けさせておくわけにはいかない。1年後にはニセコでのスキー宿泊研修が待っている。どうやってこの先生にスキーを“はかせる”きっかけをつくるか考えた。なんて事はない。スキーがM先生の手元にあればいいのだ。丁度、私がかいていたスキー板は買い換え時には少し早い、傷みが少ないうちのほうが譲りやすい、そう考えてシーズンを終えた。

次のシーズン初め、自分のスキー板を手配し、M先生に金具のついたスキー板を渡すことにした。但し、靴、ストックはないので自分で用意してほしいこと、宿泊研修で、生徒達と一緒に楽しみましょうと付け加えて。

スキーのことには疎いM先生、スキーをやる親からはこの板凄い板だよといわれまたびっくり。スキー靴、ストック等々、一式そろえることとなった。後日談だが、スキー板をもらってしまったら、イヤでもやらないわけにはいかなかったとか。

1月、冬休み中に宿泊研修のゲレンデや宿泊施設の下見、先生方のスキー研修を兼ねてニセコへ出かけた。大きな車を持っているM先生、運転も担当してもらい山へ向かった。普段から雄弁なM先生だったが、山に近づくにつれて口数が少なくなり、到着した頃からほとんど口が開かなくなってしまった。

これから起こるであろう不安が、山に近づくにつれて大きくなってしまったという。この日のた

めに、奥さんの実家近くの小さな山で滑ったとはいうものの、生徒が滑るゲレンデの斜度はその比ではない。

下見はまずゴンドラで登り、斜面状況を確認しながら滑り降りるのだが、M先生だけが初心者であとの先生方は経験者。ファミリーコースの入り口で立ち止まり斜面を覗くM先生。ここまで一緒に来たならスキーを担いで帰らせるわけにはいかない。怪我をさせるわけにもいかない。私も必死だ。1ターン1ターンごとに体の使い方、スキーの操作の仕方を伝え、何とかファミリーコースで一番きつい斜面を滑り抜けることができた。幾度となく冷や汗をかいたことだろう。

私は何人もの同僚にスキーを"はかせて"きた。スキーの指導員という肩書きをもっていることもあり、スキーの魅力や冬山の魅力を伝えたかった。もう一つ伝えたかったこと、それはスキーの指導を通しての指導とは何かという問いかけだ。スキーを指導する立場にある者は、指導した結果が即問われる。山の斜面を降りてくる術、スキーの楽しさ等、その時々 of 指導内容がそのまま結果として現れてくるのであるから。

昨年、七飯のスキー場でM先生が移動先の中学校のスキー学習で生徒を引率している姿に出くわした。あの日、ニセコの山をヘッピリ腰で滑っていた面影はなかった。今年の年賀状には「先日、息子の新しいスキーを買いにスポーツ店へ。思えば6年前だったらあり得ないことだと思っています」と記されていた。